

2021年度のテキストです

博物館展示論2021

音声ファイル1 tenji2020_2-3.mp3

第2講 展示の解剖学：資料、ケース、グラフィック

1. 展示の構成要素

1) いわゆる博物館

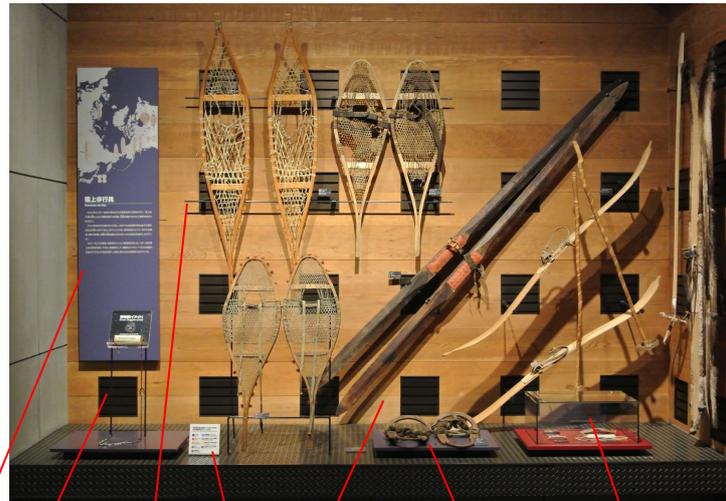
資料（標本）

キャプション（ラベル）

グラフィック（解説）

展示パネル・ケース類

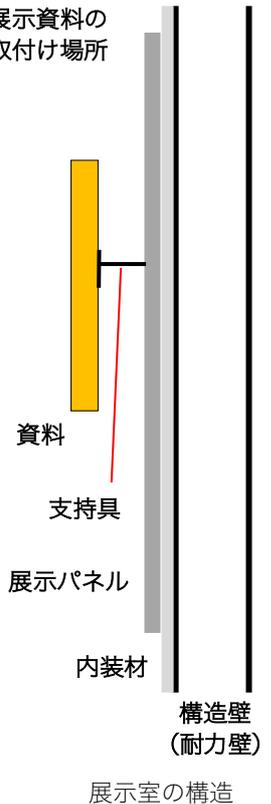
いわゆる博物館の展示では資料に説明が必要な場合が多く、展示コーナーごとにグラフィックが用いられる



展示パネル 支持具 内装材 ステージ ケース
キャプション 北海道立北方民族博物館

博物館概論8講の復習

展示資料の
取付け場所



2) 美術館

グラフィックパネル
通常グラフィックと略す

資料（作品）

キャプション（作品名称）

無いこともある（グラフィック）

美術館の展示は作品の鑑賞が主体となり、説明的で鑑賞の妨げにもなるグラフィックは少ない。グラフィックは展示室や展示テーマの入口部分に置かれ、展示資料（作品）に付随するものはキャプションのみのことが多い。



国立西洋美術館

3) 動物園水族館

資料（動物）

キャプション（魚名板）

飼育舎／水槽（ケースに相当）

動物園では飼育舎、水族館では水槽がケースや展示パネルに相当し、展示資料（＝生き物）はそのなかに収まっている。展示を考える場合、いわゆる博物館のモードがあてはまる。



4) 植物園

植物園の場合、ケースに相当する部分が通常はなく、展示資料自体が空間を支配する。展示の構成は博物館よりも庭や庭園に近い



上：サケのふるさと千歳水族館（北海道）
下：神代植物公園（東京都）

上：ハイケース（東京国立博物館）
中：ウォールケース（横須賀市自然・人文博物館）
下：ローケース（北海道立北方民族博物館）

2. ケース

1) 機能

資料の保存環境の提供、盗難や破損の予防、来館者の安全確保、視線の一定化、空間の演出

2) 種類

機能と形状が混在して呼ばれる

ハイケース（立ち見用）、ローケース（覗き込み用）

壁面ケース（＝壁面に固定されたハイケース：ウォールケース、壁付きウインドウケース）無人展示に適する

島ケース（フロアの任意の場所に設置）

気密ケース（エアタイトケース）

ITOKI <https://www.itoki.jp/solution/museum/display.html>

オカムラ <https://www.okamura.co.jp/product/?c1=public&c1-2=museum>

[ITOKIとオカムラのサイトを見ます](#)

[コクヨ tenji2021_2-2.pdf](#) [音声ファイル2 tenji2020_2-4.mp3](#)

3) 額装ガラス

絵画の展示は額装 [がくそう] して壁面に展示する。作品保護と観覧のために低反射ガラスを使用する。無反射ガラスはやや不透明で「すりガラス」のような質感で平面資料の撮影用。

低反射ガラス クリアサイト II | AGCのGlass Plaza

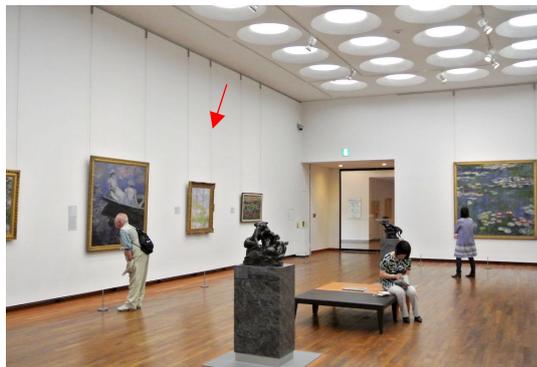
<https://www.asahiglassplaza.net/products/clearsight2/>

3. 展示パネル

様々な形状の展示資料を壁面に展示するための設備で展示会社オリジナルの商品もある。システムパネルとも呼ぶ。高価なことから小規模博物館ではメッシュに代えることが多い



低反射ガラスの例
本資料1ページ目の作品（クロード・モネ「陽を浴びるポプラ並木」）。正面から見るとガラスは感じない。確度を付けると天井の照明が反射する



システムパネルの例
左：千葉県立中央博物館
右：北海道立北方民族博物館



3. グラフィックパネル graphic panel (通常「グラフィック」と略称する) [音声ファイル3 tenji2020_2-6.mp3](#)

自然史博物館や歴史博物館などいわゆる博物館の展示は、資料+グラフィック(解説板)で出来ている。

1) 原形 図表と文章が別々。東京都復興記念館(墨田区)の展示が1929(昭和4)年の帝都復興展覧会に出品された図表を伝えている

記念館の歴史 | 東京都復興記念館 | 都立横網町公園

<https://tokyoireikyokai.or.jp/museum/history.html>

実物資料に解説と図版を加えた移動式展示解説 内国勸業博覧会または水産博覧会の出品資料と思われるものが伊勢神宮の神宮農業館に現存する

2) 普及 資料単独では理解が難しい自然史博物館や人文系博物館で普及。普及には論文など出版物での図版が先行すること、印刷技術の向上も必要だったと考える(博物館教育論第9講資料)

3) 発展 大型化、照明(バックライト)を利用したカラーコルトン。映像音響機器やコンピュータの埋め込み:液晶ディスプレイの普及で容易に。将来は展示壁面が一体となった実物資料組み込みグラフィックが登場するか

4) 言葉のずれ グラフィックパネルは、日本語は解説板でよいこれを博物館や学芸員は、展示パネルと呼ぶことある。しかし、展示業界で展示パネルは、展示物を取り付ける設備の意味で用いる。「展示パネル」がどちらの意味で使われているか注意が必要

5) バナー banner 布を用いた吊り下げ式の解説や飾り付けをバナーと呼ぶ。利点は巻き取って保管できるので収納性に優れ巡回展に向くこと、自立スタンドまたは天井からの吊り下げることによって展示室内の任意の場所で掲示が可能なこと。欠点はバックライトや情報機器の組み込みができないこと。

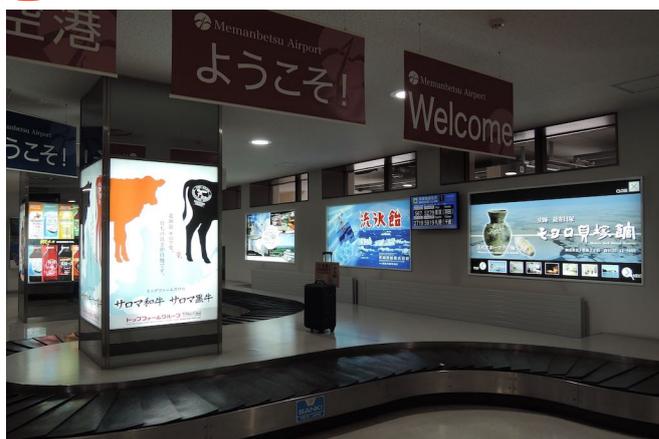


解説が必要な展示は資料とグラフィックで構成される上:企画展「卵からはじまる形づくり」(国立科学博物館2017)

中:昭和初期のグラフィック(東京都復興記念館)

下:明治の博覧会の解説板(神宮農業館)

18:50まで休憩



左:バナーは天井から吊し床で引っ張ることによって様々な場所に設置できる(美幌博物館)
右:後ろからの照明(バックライト)で目立たせるカラーコルトン(女満別空港)

4. グラフィックの実際

1) 構成

タイトル (見出し)

リード (概要) またはサブタイトル 無い場合もある

テキスト (本文) または解説本体

図版 無い場合もある

その他 (映像、音響機器、コンピュータ、資料)

2) 各要素

フォント 明朝体かゴシック体、まれに丸ゴシックを用いる。同一フォントでも細い (ウエイトが軽い) とおしやれに見える [サイズ見本 tenji2021_2-3.pdf](#)

サイズ タイトルは遠くからでも目立つ大きさ。テキストは1-2m離れても容易に読めるサイズが適当であるが、場合による。資料の隣に置いて近づいて見るようなグラフィックであればより小さくても可能、展示室の入口にあり、人が集中することから遠くから見る、とおろざまに見たりする場合は大きいサイズにする

色彩 黒が基本。一部の水族館のように室内全体が暗く、展示のみに照明がある場合は白やバックライトのこともある

文字数 多くの人に読んで欲しければ150字まで。知りたい人向けなら長くてもよい。博物館では実際に数えるようにしてほしい

図版 (写真を含む) 解説に適切な内容、かつ色彩や見栄えの考慮も必要

デザイン、色彩、統一感 (展示室や資料との)、一体感 (展示室や資料との)



上: 資料収集を業務としないビジターセンターではグラフィックが展示の中心。転じて実物資料の不足をグラフィックで補う場合もある (アポイ岳ジオパークビジターセンター)
右: 鑑賞に堪える図版や大胆な文字の使用も時に効果的で印象に残る (ゼンケンベルク自然史博物館、ドイツ連邦共和国フランクフルト市)



グラフィックの要素の分解。歴史など「こと」の説明は長くなりがち (国立歴史民俗博物館)



ひと目で読める文章量は経験上150-200文字程度である。200字では多く140字程度が適切か。北方民族博物館の例を示す。
左: 17字×8行=136字、中: 21字×13行=273字、右: 27字×12行=324字 * 1行の文字数は一定していない